▶ 駒.zone vol.11

将棋詩特集

将棋短歌

将棋小説

キャンセル

駒.zone ガールズ

目次

将棋詩特集
五行詩「対局直前」　贅楽夢　2
田代深子
投了お化け　清水らくは　6
世界の終り？　ジェームズ・千駄ヶ谷　7
将棋のない世界　浮島　8
「しんじつ君ごよみ」　平川綾真智　9
キャンセル　清水らくは・ぴろち　18
＃人工知能将棋短歌　清水らくは・浮島　35
駒.zone ガールズ　欠片食器・若葉　39
将棋短歌　浮島・しむしむ・跳馬　51
あとがき　52

五行詩連作「対局直前」

贅楽夢

［ミクロコスモス］
「天井のシミを
数えている間に終わるよ」
彼に言われて上を眺めると
そこには一五ニ五手詰の
詰将棋の図面が染み付いていた

［初夢］
あの人の頭蓋に
十本指をズブリと刺して
脳みそ取り出してみましたら
それはそれは　大きな大きな
将棋盤の形をしていました

［対局前のウォーミングアップ］
詰めパラ
詰めパラ
詰めパラ
詰めパラ
何これ指し将棋より面白い

［ひと目の手筋］
最近全く手が見えない
今日も見えないかもしれない
きっと目が悪いのだろう
ぼくは眼球を抉り出し
御神酒で洗い清めてみた

［持ち駒］
飛車を取られ　角を取られ
金を取られ　銀を取られ
どんな駒を取られても
駒台に乗ると「すべてが歩になる」
そんな呪いをかけてみる

［スズメ刺し］
１七香
１八飛
貫かれた槍先から滴る
真っ赤な真っ赤な
血の香り

［ネット将棋］
接続切れ
接続切れ
接続切れ
今日の対戦相手は
きっとみんな●●●●●

［振り飛車ローテーション］
三間飛車　四間飛車
ゴキゲン中飛車 向飛車
角交換振飛車 石田流
先発陣は万全なのに
中継ぎ、抑えの駒がない

［将棋は歩から］
三歩持ったら継ぎ歩に垂れ歩
四歩持ったら叩きも入る
五歩でぼくらはダンスして
六歩以上は駒台狭く
二歩を打ったらキミの負け

［玉の早逃げ］
左へ逃げ 右へ避け
下へ隠れ 上へ免れ
遁走して 逃亡して 退散して
抜け出し 振り払って 掻い潜る
人の世は将棋盤に並べられた御伽噺

［感想戦］
枕元に死神が現れて
「キミはこれから死ぬんだよ」
と言ったから
将棋盤を挟んで半生の
感想戦をやってみた

田代深子

おはようございます
疲れの溜まった洞穴から穴熊の
にょろり輩出する夜道を歩きました
点々と小穴があいて光の漏れる道
怖くて目をそむけたら　朝でした

おはようございます
冬の木花が揺れ　はた花弁がおちて
よくみれば枝に　くすんだ鳥です
蜜をとっている　おちた花弁の
形に一連の筋がある

おはようございます
朝方の夢で恋をしまして
相手がわからない　歳も処も
ただ恋のきもちを　そんなに忘れていた
悲しさに似ていたかと指を伸ばし

こんにちは
そで振りあうも他生の　など
さばきあう覚悟のつもりであったはず
こぶしを地に突き他人の心積もりを
身構え拒んでいたら　雪ですよ

こんにちは
お昼ごはんに醤油をかけ
おやつに苺コンフィチュールをかけ
夕食には山椒をかける
それらは本質ではないけど細部に神は

こんばんは
冴え冴えと夜空が濃紺である
月が澄んで見えるときは
おおかたひとり退路を心得たときですか
ボトルから水を舐めぶつくさと

こんばんは
飲んだら指すなの誓言　飲むと
さしたくなりますから　大駒を切り
喉笛をかきたくなり　御承知の如く
頓死

おはようございます
封じたものは　封じたままに
毎度の指しなおしを繰り返すもので
ずっと封緘は増えます
同じところに幾重も封がかかる

投了お化け

清水らくは

その日五度目の接続切れをした時に
スマートフォンの画面から飛び出したお化け
君の家に住みついて離れない
ただじっと君のことを見つめている
君はいつしか震えを乗り越えて
いつものように将棋を始めた
そしてうっかり飛車を取られて
六度目の接続切れ
じっと見つめるお化けの目が
少し大きくなった

太陽が昇ろうと雪が降ろうと
君は将棋を指す日々を繰り返す
そして何度も接続切れ
お化けの目はついに顔より大きくなって
部屋の半分ほどになった
それでも君は気にせずに
一日七度の接続切れ
お化けはついに口を開いた
君がするはずだった投了が
裏側の世界で震えているよ

君は少しだけ眉間に皺を寄せて
しばらくしてまた将棋を始めた
気が付いたらあと三手で詰み
接続を切ろうとしたとき
お化けの目が部屋いっぱいになって
君の手は意図せず投了ボタンを押した

気が付くとお化けはいなくなっていて
君の元気もなくなっていた
投了は疲れる
君はそのことを確認して
スマートフォンの電源を切った

そして僕は出番を待っている
感想戦お化け

世界の終わり？

ジェームズ・千駄ヶ谷

この世界が終わっていると痛感できる時間
正座しているだけで挫折しそうになる空気

あいつはへんなニオイがするし　そっちの奴の目つきは異常
極限状態に耐えられないやつは　みんな消え去ってしまう

正気を保つ努力は　たたかう力を弱くするから
足元をすくう波に抗っているうちに
強くはなったが夢はなくした

眼鏡のレンズを何回も拭きながら
僕は充血した眼を吊り上げて笑みを浮かべる

くっくっく　３二飛車

将棋のない世界

将棋のない世界にうまれてくればよかった
将棋のない世界にうまれてくればよかった
将棋のない世界にうまれてくればよかった
将棋のない世界にうまれてくればよかった

喫茶店の隅で僕はうめいた
ほんとうの将棋をみるためには
たくさんの王さまたちを殺さねばならない

鴉が曇り空をはしってく

喫茶店に立ちならぶ棺桶
真っ黒な旗が冬の空にたなびいて
口の中に駒を詰め込まれた男が首をつる

浮島

将棋のない世界にうまれてくればよかった
歩の行列が朝の線路に飛び降り続け
将棋のない世界にうまれてくればよかった
コーヒーの底にはりついた粘つく影が
将棋のない世界にうまれてくればよかった

もう僕を殺さないで

将棋のない世界にうまれてくればよかった
将棋のない世界にうまれてくればよかった

「しんじつ君ごよみ」

平川綾真智

。　。

login　→　click　〉〉　@

しんじつ君ごよみ　('14/02/28 02:36:29~)

〉〉

〉〉s.b.「しんじつ君ごよみ」　〈

〉〉　s.b.name:しんじつ君　…　アバター未設定

〉〉　九州　1979年7月9日　事務所員

〉〉　[「再びブログ詩を書きます。シェアしていただけたら嬉しいです。」]

〉〉　s.b.frend数-194名

〉〉　Copyright (C) 1999- sns.blog, Inc. All rights reserved.

〉〉＊

〉〉

「#07」

〉

〉〉

〉#07「ラインベルガ―読譜中には升田幸三九段

〉　名人戦棋譜」　〈

〉〉

〉

〉　眼前の天使がリヒテンシュタインへ羽ばたきを満たし

〉てしまったんだから**升田式石田流**は恒星を鳴らす。これ

〉は確定された事象なんだよ組み込まれていた公宇宙での

〉法則なんだ。湖畔の炎に咲いた、あの軌道たちを聴いて

〉ごらんなさい。ヨーゼフまみれで踊る天体が、ほら結晶

〉化されきって究悦にむせぶ笑みしかない。

〉　半夏雨の贓物を撒いた集合団地へ走り進んでいく野分

〉は、街樹松に残り立つ涼気の肌を割り終える。児童公園

〉で爆雨を棹する雲梯の舌が丸湿粒に**角**度を付けると血流

〉から背を丸めた排水パイプは、打音の手へと導かれてい

〉く。ダイソー三本ライン・ジャージで正座する、独居ア

〉パート内で導かれるはずの前途は、やっぱり今日も滞る。

〉相変わらず、なんなんでしょうね一体。どうすりゃいい

〉んですかね全体。目薬まで点してみたのに何度見返して

〉みようとも、楽譜と共に広げている読解ノートの両面が

〉白い。こいつは本当、毎度のことながら、やはり困った

〉もんですよ、うん。山積み仕事を落ち着かせて遂に迎え

〉た休日だっていうのにさ台風十三号が寄りにもよって鈍

〉足通過しているわけだし**CS**将棋をつけてみても囲碁や

〉ってるしネットの電波悪いし後ひと眠りするには睡眠量

〉が足り過ぎてるし詩作を求める思考行脚も部屋から出て
〉行かないし行く場所なんて元々なかったわけですし。で
〉も何かしらしとかないと欝々とした実が生りそうだし、
〉とりあえずって四粒もフリスク齧って光って叫んでヤマ
〉ハ楽譜研究者モードに変身した自分へと到達したんだ。
〉到達したんだと言うのにね、うん。どうしてだろう第一
〉次譜面解析ノートは、いつまでも変わらず無垢な純白の
〉ままで汗だく意識を混濁させ続けていくだけだ。こんな
〉日でも地球に優しく残暑を乗りきらせてくれる1,980首
〉振り扇風機の風が、リサイクル・ノイズを含みながらも
〉少しづつ無印良品ノートページを繊維ごと捲り上げてい
〉く。万年家用パジャマと化したクマモンTシャツが汗だ
〉くの脇を抱えて袖口をはためかせている。フィルター掃
〉除して間もないクーラーの喉元が爽やかな世界観存在と
〉共に麗しの僕エコエコですよスマイルを浴びせてくる。
〉握りしめたトンボ2B鉛筆が拡散してばかりの集中力を、
〉それでも背を叩いて突き立ててくる。ああ、どうしてだ
〉ろうね拡散とか、こんなこと前は無かったっていうのに。
〉本当いっさい無かったっていうのにね、うん。そう胸郭
〉を張り音楽科に通う友達から基本の楽典さらっと口述さ
〉れた学生時代17年前のあの時から。まったくの御世辞
〉で興味示してみたら熱っぽく語られスコアが音楽譜面が
〉演奏再現目的以上の芸術書籍であることを知ってしまっ
〉たあの日から、ずっとずっと。変わった日々は膨らむば
〉かりで存続していくばかりだったんだよ。だってさ演奏
〉しなきゃ意味ないと思ってた線符羅列が楽典通すだけで
〉同じ形態様相のまま新たなページ奥を捲り上げていくん
〉だもん。今まで人々が集積生命としての意義を探りあて
〉てきた根源の巡りと見出す光源の明滅を拡げ両腕を開い
〉ているんだもん。自分自身が産出されて来た積重原罪と
〉いう歴程の全貌が綿綿と巡りあう水となって照射されて
〉いるんだもん。うん。楽譜って、やっぱ歴史と個個人が
〉握手するために差し出された友愛の右手だったんだ。そ
〉うさ慎み深く居披する詩篇そのものだったんだ。貪り読
〉みまくりましたさ。自らの金銀財宝を見つけながら、う
〉ん数学と哲学と神学の融け合う綴りに浸りきりノートに
〉翻訳書きつけ解釈も加え停滞することなんて決してない。
〉絶対に止まることなんて有り得ない。うん。そのはず、
〉だったんだけれども、ね。ふくらはぎの中央まで巻き上
〉げてみたジャージ裾へ囁く脛毛達が汗玉を掃く今となっ
〉ては、総じて、すべてが過去形です。うん、あれだよね
〉楽譜読書したら身体から真なる連輝を湧出させる芸術自
〉身となって言語化ノートとの接触なんて日常動作となっ

ていたんだけどね本当。まあ去年くらいから断片的に楽譜解析、一回だけ止まったことはあったけれども。あれから歩みも変わりましたし再開された自分の方向は上手くいくようになったと思ったんだけれどもね、うん。唇と鼻元に挟んでみた長身鉛筆が、真一文字の肢体線を胸元へ整えている。DK扇風機の細長い冷風が、糸ぼこり7本の筋を蛍光灯の光へ不規則に泳がせている。ローテーブルで呼気を撃つ刷印され面映ゆい「Ex Sion」の文字が眼前で快活な四肢を置き去りにしていく。あれかな焦りなのかな、おこがましいくらいに。譜面初見を行う瞬間、数字交差が浮かび上がって概念重層展開の解釈へと即座に入っていけちゃう夢想の自分に全く為れていない成れそうもないってことへの。怯えなのかな呆れて欠伸出ちゃうくらいに。乖離しても成長しきってる自己イメージ像での2週5週目6週目あたりの譜楽関係とが未だ結ばれていない、いけない結実しそうもないことへの。路面を斜めに切っていく軽自動車に開かれた橙光が乱舞する豪雨達の打点を吹き溢していく。巨躯体が両手を押し当て振り仰ぐ度に体液を漏らすアパート壁が雨どいの影を消していく。雨戸に遮られつつ窓硝子を殴撲し㋮ていく網戸と重なり吃音に隈どられた眼球が、綴られて

いる2分音符を映流させる。大きな染みを垂らす鼓動の闖入が生茶ペットボトルを大仰に揚げ床に倒していく。折り重なる契機の濃度が嵩を増し、3筋に振り浮き飛車で受ける珂鮮烈な駒音が聞こえてくる。この深淵さを埋めることが出来るのは、将棋の棋譜だけだ。楽譜読書を視点に見解していく1971年・第三十期名人戦七番勝負・第四局「升田幸三九段・対・大山康治名人」戦の棋譜だけだ。硬直頭蓋の迂路も垂直に曲がりを正すよ間違いないさ。五線譜からの慈愛への光も直ぐ取り戻せちゃうよ相違いもないさ。さあ、抱かれ入っちゃおうじゃないか抽象転化の根幹を創りあげてしまう祝福界宙の真っ正面へと全身全霊を投げ出して。

　なだらかな潤沢の肌を纏った環形蛍光灯が福音の影を編みながら冊子奥をはためかせている。机面へと溶かされた高清澄な果が芳醇な紡ぎの芒種に両膝を整えている。すすみ突く先手升田九段の初手▲7六歩により徘陽の球体が静止した圏世を開き根幹継承を創出していくんだ。そう灯される安息まで含めた7は天上界の父なる神と人とが拍交する認識発芽であり絶えることのない暦完成への想起だ。そう天地創造に費やされた日数であり最初の完全数6＝六は、いつだって経緯史の変えられない始源だ。あの等間隔持洪で遂行され続けていく節内において

「▲７六歩」ほど澄薫な広く美しい始様相が他にあるもんか。本当、考えるまでもないよね。うん。何度だって繰り返し叫んだって良い。独立した印度起源の方法的循環過程を通す営みでありつつ既成の西欧発起の維持と複出奔をも再検討させる領域はラベル暦の共振横断を、あまりに確かなまでに産みつけている。まさに自然界と主観客観の育む先端解明での矩象現なんだ。すぐさま対位形式化された倍域を構築する後手が泰然△３四歩と応じてくる。そう定義枠さえ延ばしちゃう父と子と精霊の聖なる３は物承現に対する暗黙の大前提でありながらも添われ実る全事象の必然背理だ。そうそう大地自身でありまするが故に実相仮想のインターフェイスであります世俗姿４は直観的把握と経倫的体験の一部分に基づいた主体と客体の相関接界なのですよ。道徳軸と慣習軸の機能作用が互いに重複し交錯し競合しあっちゃってるんだ。等間隔分節の精神的な様式的とも応する共通分母が踏襲拡張性の歴史前景にさえ移ろいを展提化しちゃってるんだ。あの託宣だ。そして、すべやかな▲７五歩が開かれた個体的意味を解体し無時間的な共同体をなし空間を創出していくのだ。聖痕の数５は磔刑で顕在化するに到った原罪という宿命を負う人間存在そのものだ。ほら五本指を拡げ時間を昇り上がる歴構成の近代主体パラダイムが外界との区切りを越え神託をも掴んでいく開かれていく。うるむ居飛車明示の△８四歩の聖歌概念の急が攪火への俯瞰を推し進め、天使を表す８の中核的地との交差に振飛車敢行である以上に石田流としか言いようがない▲７八飛の超越的羽搏きを発していくんだ。ごらんロンギヌスの槍を彷彿とさせる△８五歩の鋭利に▲４八王の主の御使い的あらたなる磁界を形成しているよ。ネウマを不即不離に結びつけ△６二銀の種族枠組みへと向けられた空間形象が、なんと▲３八王を現出させるんだ。神秘理へ昇り第三格としての精霊自身を含んだ複合が産み落とされた器を飛翔に引き連れていく。濫費してきた結果を救う６筋で伸ばされた歩が自己理解と他者理解に肥え王様を、玉を２筋へ互いに駆動させていくんだ。美濃囲いだよ急戦の左銀上がりだね。なぜ未来ではなく過去を覚えているのか。知りうる先手が▲７六飛の共鳴と邂逅に啓示し▲７八金の喚起的浮遊の恩寵を示せば喝采がわき起こっていくのだ。恒常的膨張の接近を凌駕していくのだ。時間が空間が完全な運動体に紡がれ発火していく升田式石田流は初源の光そのものなのだ。

　ペットボトルキャップを愛撫する草食的な蛍光灯の両

〉掌が暴雨の顔を締出し、笑みをくゆらせる室内へと壮麗〉の球体を敷き始める。片頬だけ屈みつつある汗筋の平泳〉ぎは、ふやけきった破顔の皮膚皺を目じりに洗い菜穀雨〉の温度へ辿り和らげている。ウッドクロス天井の礼節に〉翻らせ躓いていく防水ベランダは羽虫の背を潰し斜線の〉湿気を助走させている。むしっていく蝶形骨の粘液を剥

〉き出し覆われた瀑布の雨粒が灰白色に聳えたアパート壁〉を新築借家の群れごとディスポ鍼で狙撃し呟き折ってい〉る。窓枠は淡い。しかし、ね。さすがでしたね。お見事〉ですよ本当すごすぎるよ。魅せられますよ痺れますよ侍〉の横顔だよ人智を謁する盤の刷新だよ。うん、やっぱ魅〉せられる、は時を超えるのだ。本当に、そうなんだよね、〉うん。月極駐車スペースが看板から灰の涎みずくに垂れ〉て文字表面の画数を足すと並べられたホンダワイパーが〉落弾する人差し指を掻き分けていく。**▲７六**歩**△３四**歩〉投擲され路面の白線ラインに横臥している籠付きクロス〉バイクの背筋が大葉子茎にサドルを貪られている。チャ〉リ鍵が十円銅貨の隣で呼応した斉唱を歯ぎしりさせ**MO**〉**NO**消しゴムの体躯に震えを噴霧していく。うん、だー〉ますだーます幸**三**先生。**早石田**は素人将棋の見本でしか〉なかったっていうのに。それでも名人に**香車**を引いて勝〉った腕力をと創意を加えて**戦法**に復権を与えたっていう〉んだから甚大な魅力が佇むのも当たり前だよね、やっぱ〉りさ。うん、そうだよ実力制第**四**代名人としての威風と〉掲げられた「新手**一**生」の体現が**角**を換わっての**▲７七**〉**桂**へ、深奥に達する光輝を滾らせているんだよね。ちょ〉いと前に久保**九**段がタイトル獲ったり**二**冠になったりし〉たのも、この棋譜あってのことなんだもんね。すごいよ、〉うん本当に、ね。早めにライトを落とした眼鏡市場のポ〉ールサインに抜毛を繰り返す**▲７五**歩**△８四**歩**▲７八**飛〉**△８五**歩**(84)**さむい街路椰子の堕胎が甘やかに落首し刺〉し殺していく。改築中のマクドナルド跡から呻かれた時〉雨れていく後姿ポスターは赤毛を函溶剤に揮発していく。〉雲襞にから延ばされた足首がハンズマンの郊外縦列を射〉し踏み抜き**▲４八**王**△６二**銀**▲３八**王**△６四**歩**▲２八**王〉**△４二**玉**(51)**地下室のレンジローパーと灰土嚢を嘲笑の〉断末へ漲らせていく。まとわる家電量販店の裏口階段に〉走らされた静脈を釣る配水管に身を屈めた土鳩たちが羽〉毛を擦らせ赤目の瞼を塞いでいる。起動し始めた**HDH**〉は**iPhone**のアラートを鳴らし**E**テレ番組名表示の青色〉光と共に机上を規則的に震わせていく。ひそやかな恩寵〉が証明を与え抱擁の星を結んでいく。うん。この感じな〉ら楽譜、読み解けるんじゃないかな今なら解析し尽くせ

＼ちゃうんじゃないかな。元禄期の盲人棋客、石田検校が＼創案した戦術に300年の時を越えて息吹を与えた姿勢追＼及。まさに過去からの旋律体系を受け継ぎつつ無限なる＼ものを理想とした19世紀ロマン派音楽そのものじゃない＼か。規律と規範から解放される5五地点に打たれた角行＼へとピュタゴラス音律からの強襲を立ち上げていく。序＼盤から7筋の基本動機をもとに手の展開部が繁殖し系統＼的全体図像が成長完成していくのだ。▲3八銀△3二玉＼▲7六飛△4二銀(31)完成し間然とすることのない洗練＼された官能性と旋律の緻密性がダイナミクスから光景の＼頂点眺望に達する生気に満ちた躍動を放っていく。古典＼へ対位する再現主題の高潮を循環として楽句を確立して＼いくんだ体験させるんだ。きらびやかに光り続ける楽譜＼のページを我慢できずに捲ってみる。▲7八金△1四歩＼▲2二角成△同玉▲7七桂△3二金(41)ひろげられた真＼理が掌をさしのべ、おい読めるぞ読めるじゃないか見た＼こともなかった風景が観念が佇立していくじゃないか。＼流入していくぞ止まることないじゃんか読めるぞ、おい。＼やっぱ一時的なものだったんだ気のせいだったんだ17＼年間は間違いなかったんだ。自律意識が支柱を通す。光＼彩が雅定理の▲5五角打△4四歩▲6四角△6二銀(62)＼頬を与える。自然遊歩道に剥製の鼠が腸をこぼし溶岩流＼の野草を寝かしつけている。火口へと酒をかける縫い蛇＼口が▲5五角△8四飛▲6六角△5四角打▲7四歩△8＼二飛(84)錦江湾に皺を増やしていく。蘇生する篝火をた＼いた経メリヤス製造工場が野生の紙を人質に肘関節へ奥＼歯跡を芽吹かせていく。馥郁とした鴉の尾羽は囀る舌を＼▲7四歩△8三飛▲9六飛△7四歩▲4四角△3三桂▲＼5五角△6四歩打▲6六歩△7五歩▲6五歩△8四飛(8＼3)抜き取り水銀虫だった点滴へと夜啼きしていくんだ。＼うん。良いじゃん私やっぱ読めてるじゃん。本当に実に＼何度でも、ね。うん。渦を刺激する観念複合体の還元が＼力動に純声調の響球から現れた天使へと抱かれていく。＼▲6八銀△7三桂▲6七銀△6二金▲8六歩△7四飛▲＼8五歩△6五歩▲1六歩△4五歩▲8四飛△5四銀▲4＼四角△6三銀(54)解析、無事に終えられたら良いな。そ＼して解析結果▲5五角△5四銀▲4四角△6三銀▲5五＼角△6四銀▲4六角△4五歩打▲6四角△同飛▲5五銀＼打△7四飛(64)を、いつも通り詩の構成に当てはめてい＼くんだ。私の自由詩の新たなる▲8四歩△9五角打▲5

＼六飛△8 四飛▲9 六歩△7 七角成▲同金△8 八飛成(84)
＼枠組みが湧出した方向へと数学と神学と普遍的無意識を
＼呼び込んでいくんだ。▲7 八金△9 九竜▲7 四歩打△4
＼六歩▲7 三歩成△4 七歩成▲7 三歩成△4 七歩成▲7 九
＼歩打△4 八歩打▲5 九金△3 八と(47)そうだと良いな。
＼うん。緑青の甕から吐き出されていく凍った柏手の水が
＼楕円に木造家屋を▲同王△7 三金▲8 二角打△7 四金▲
＼4 四歩打△5 二角打▲9 一角成△6 六歩▲同銀△5 四香
＼打▲4 六飛△6 五歩打▲5 五銀△3 五銀打▲4 八飛△5
＼五香(54)崩していく。メニコン O2 コンタクトレンズが
＼膾炙しソフティアを飲みたがっている。再現的表現から ©
＼形態を解放し発展プロセスの▲同馬△9 六竜▲9 七歩打
＼△8 六竜▲8 七歩打△8 四竜▲4 三香打△4 七歩打▲6
＼八飛△3 一銀▲2 六桂打△6 四金(74)中でベルグが叫ば
＼れていくんだ。角質を細める唇に生茶を入れていく。▲
＼5 六馬(55)△4 四銀(35)▲3 四桂(26)△2 一玉(22)▲2
＼二香打△1 二玉(21)▲4 二香成(43) △同銀▲3 四桂(2
＼6)△2 一玉(22)鉛筆尻のキャップを直して棋譜へと目を
＼戻してみる。▲1 五歩(16)△3 四角(52)▲同馬(26)△4
＼三銀打▲1 四歩(15)△2 二玉(12)うしなわれた視野が像
＼を結びながら持病の正常眼圧緑内障を疼かせてきて胸の
＼クマモンを▲1 三歩成(14)△同香(11)▲同香成(19)△同
＼玉(22)▲1 四歩打△2 二玉(13)掴ませる。そう盲目の棋
＼客なのに、なんで将棋させたんだろうとか思っていたけ
＼ども今なら、そうだね▲1 六馬(34)△1 二歩打▲5 六銀
＼(67)△4 五香打▲3 四香打△2 四桂打▲2 六馬(16)△5
＼四香打▲4 五銀(56)△同銀(44)▲3 三香成(34)△同金(
＼32)分かるや、うん。今日もタブロスさして眼圧下げない
＼とだ▲2 五桂打△5 七香成(54)▲3 三桂成(25)△同銀(4
＼2)な。升田先生の逸話みたいな命がけの自分になりたい
＼な。ゆるく生きても▲5 三馬(26)△6 八成香(57)▲3 一
＼角打△1 一玉(22)いきたいな。一回ちゃんと将棋も指し
＼てみたい。でも怖いね。151▲5 三馬(26) 152△6 八成
＼香(57) 153▲3 一角打 154△1 一玉(22)アプリで何度か
＼タップしたことあるけど盤駒に触ったことないんだもん。
＼だからなんだろう 153▲3 一角打 154△1 一玉(22) 155
＼▲2 八王(27)156 ね投了図だけは、いつも分からない 1
＼55▲2 八王(27)156△1 五香打 157▲投了(まで 156 手)
＼。読み解けないよね楽譜と違うや、なかなか解析できない
＼よね。これ本当なの。▲2 八王(26)本当に、これ詰むの
＼かな。1▲7 六歩(77) 2△3 四歩(33) 3▲7 五歩(76)掘り
＼起こした土穴に体を屈め入れた母猫が腐り汁を灰石へと
＼化していく 155▲2 八王(27)。一体どうやったら詰むの。
＼やばい。美しい棋譜なのに升田先生が負けたけれども解

> 説している対局なのに 155▲2 八王(27)156△1 五香打。
> 台風だからなのかな。意外と歴史が変わったのかな 155
> ▲2 八王(26)156△1 五香打。なんでだ、どうやってみた <
> って私が持ったら後手が負けちゃう。
> 「#05」 <
>> ＊ hn B / J L ＊
> 典：1971/05/11 10:00
> 第 30 期名人戦七番勝負第 4 局
> 於 - 神奈川県・湯河原温泉「石亭」
> 消費時間：156▲230△517（持ち時間 9 時間）
>>
> right! (37) | comments(6537) | share(1)
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 02:01 x
>> キタコレ wΨ(゜∀゜)Ψ <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 02:23 x
>> キタコレ wΨ(゜∀゜)Ψ <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 06:18 x
>> なんで詰ませられないんだよ wΨ(゜∀゜)Ψ <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 13:02 x
>> もっと石田流について勉強なさい。シェア致します。<
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 17:17 x
>> 大山先生に触れないとか …(;゜Д゜) <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 19:31 x
>> >21 様。何度目も御忠告ありがとうございます。本作品は <
>> 確かに棋譜をコラージュしていますが棋譜の著作権を侵 <
>> 害する目的で制作しておりません。何か、ございました <
>> ら事務所までメールいただけたらと思います。よろしく <
>> 、お願い致します。 しんじつ君拝 <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 20:19 x
>> → そこは、あやまち拝だろ?(・´д・`) <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 20:23 x
>> [哲学（笑）] しんじつってあやまちか? w(・´д・`) <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-07 23:17 x
>> しんじつ君。また飲みましょうね(ﾟ∀ﾟ)ﾉ <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-09 23:04 x
>> イイネ!(^ω^) <
>> Commented - 8 by __ at 2015-08-09 23:04 x
>> →→ジエン ww(^ω^)
<
>> ＊
>>
 月別アーカイブ
 友達一覧
申請

<a href="http://sns.blog.jp/s-t/link/
www.japan-poets-association.com/">
リンク [日本現代詩人会]

詩集「市内二丁目のアパートで」(¥1,500) click 購入/
詩集「202.」(¥1,800) click 購入［注目　おススメ　レア］
〉〉
〉〉

しんじつ君ぅぃよぁ Ads by Goooggle

。

click 〉〉 @ →

logout

。

キャンセル

イラスト　ぴろち

キャンセル

清水らくは

美駒は、美しい空中庭園のベンチで詰将棋を解いていた。タブレットの駒を次々と動かして、毎分5問のペースで十分間、これを3セットやるのが日課だった。2セット目を終えて息を吐き出した時、メッセージが届いた。「分刊将棋」からのものだった。

【アッキビテル、ついにサポート棋士を発表】

美駒は、つばを飲み込んだ。

将棋界に、新しい動きが起こっていた。電脳棋士も参加可能な団体New Japan Shougiに、「チーム　アッキビテル」が参加することになったのである。アッキビテルは数々のゲームでトッププレイヤーをサポートしてきた集団で、これまでかかわったプレイヤーを必ずその競技において一番にしてきた。そのアッキビテルが、ついに将棋への参戦を表明したのだ。

アッキビテルにはプレイヤーは誰ひとりいない。その代り、メンタルトレーナーやフードアドバイザー、医師にマッサージ師、美容師までもが複数人所属している。プレイヤーがゲームにおいて最も良いパフォーマンスをするにはどうしたらいいか、そのことを徹底的に考えている集団なのである。

とはいえ、誰でもトップになれるわけではない。アッキビテルの代表は常々マスメディアに対してこのように言っている。

「トップになれるのは、選ばれた天才だけである。ただ、選ばれた天才の中には非効率的なやり方しか知らない者もいる。そういう天才は、普通の天才によく負ける」

そして、美駒は息をのんでから、タブレットをタップした。ページが変わり、最も重要な情報が現れる。

【サポート棋士は、New Japan Shougi所属の女性棋士、ミーナに決まった】

美駒は、のんだ息をゆっくりと吐き出した。

何となく、予想できていたのだ。ミーナは、特別な存在だから。

だだっ広い会場の中に、いくつものアーム型ロボットが将棋盤を挟んで並べられていた。美駒は、その間を歩きながらモニターに映る顔に頭を下げていた。

アマチュア閃王戦、DOT予選。これは、将棋用ロボットであるDOTを使用する、病気や居住地などの問題で地区予選に参加できない人向けに用意された大会である。一昨年まではインターネット上で開催されていたが、DOTの廉価版が発売されたのを機に、誰

でも「盤駒を使って」指せる大会へと変わったのだった。

モニターにはカメラも取り付けられており、お互いの顔や盤面だけでなく、会場の様子も見ることができた。美駒がそばを通ると、ぺこりと頭を下げたり、小さく微笑む人もいた。

昨年から変わったのは、彩りである。家庭にDOTが普及するにつれ、デザインに対する要望が増えてきた。それにこたえて、様々な色や模様のDOTが発売されるようになった。今回は参加者の希望のDOTを事前に聞き、それを用意して対局することになった。

一番人気は、シンプルなメタリックブラックだった。中年男性に特に多い。続いて、和服を意識した和柄各種。三十年ぐらい前まではプロのタイトル戦では和服を着るのが通例で、その雰囲気を少しでも味わいたいという年配の人が多いのである。

また、チェリーピンクも人気だった。ほとんどが、若者からの要望だ。大会に出たくても、両親などが付き添う余裕のない子供たちも多い。中には両親が許可してくれず、こっそり参加している少女もいる。美駒の眼には、ピンクのDOTは動きが軽快に見えた。

会場にはプロ棋士の他にメカニック、報道陣、そしてアッキビテルのメンバーがいた。今回は三人のメンバーが訪れていた。

アッキビテルには、将棋に精通したメンバーがいるわけではない。彼らは将棋界のことを今から学び、そして適切な人間をスカウトするつもりなのである。

アッキビテルのメンバーは、白衣を着ていた。マスクに赤いサングラス、白い帽子をかぶっていて、その中に髪をまとめている。それが、彼らの制服だった。サポートメンバーはできるだけ個性を見せない、それがアッキビテルの方針だった。

美駒は、どうしてもその姿に慣れなかった。彼女は、DOTには表情を、感情を感じることができた。けれどもアッキビテルのメンバーは、衣装だけが宙に浮いて、ランダムに動いているように見えた。

「美駒ちゃん、こっち」

先輩棋士に促されて、美駒は盤の前に着席した。天井から吊るされたクレーンがDOTを運び、彼女の前に下ろしていく。空き番になった人たちとの、指導対局の準備である。

三体のDOTが、美駒の前に鎮座する。モニターと無線で接続され、それぞれの対局者の顔が映し出された。そして、カメラが美駒の顔をとらえ、それぞれの家庭のパソコンに映し出した。

「振り駒、してみます？」

美駒は、首をスライドさせながら尋ねた。三人とも、頷く。美駒は微笑んで、「振り駒、オン」とつぶやいた。モニターから駒の映像が消え、宙に五枚の歩が浮かび上がる。両手を合わせて手首を振ると、「しゃかしゃか」という音が、スピーカから流れた。

「先手、後手、後手ですね」

駒は宙に舞い、盤上に落ちた。表と裏が確認されると、仮想の

駒は消え、現実の駒が戻ってくる。
「では、よろしくお願いします」
四人が、頭を下げる。対局が、始まった。
そんな美駒の後ろに、一人のアッキビテルメンバーが立っていた。対局の様子を、じっと見守っていた。
「黒山美駒さんですね」
対局を全て終えた美駒にかけられたのは、のっぺりとした声だった。
「はい」
「私、アッキビテルの7549です。番号はランダムなので、メンバーが7千人いるわけではありません」
「は、はあ」
「いろいろと見さしていただきましたが、あなたが一番バーチャル対局に慣れていますね」
「え、えーとそうかな」
「幼い頃から慣れ親しんできた世代ということでしょうか。データによると成績もいいようですね」
「それほどでも」
「ミーナと団体戦をしたこともあるのですね」
美駒の眼が、細くなった。口元に、ぎこちない笑みを浮かべる。
「はい」
「私たちのメンバーになりませんか」
美駒は、目を見開いた後に、小さく息を吐いた。
「それは、できない」
「そうですか。でも、私たちと共になら頂上の景色を見ることができます。自力では、おそらく無理です」
「私は、私が登れるところから景色を見るから」
「わかりました」
7549は、頭を下げた後静かにその場を去っていった。美駒は、口をへの字にしてその姿を眺めていた。

「やはりそうか」
銀次郎は、低い声でつぶやいた。パソコンのモニターには、頭がい骨が映っていた。
「どうしたの」
「一応秘密の資料だから、他の人に言っちゃいけないぞ。これは、南牟婁の頭部だ」
「チャンピオンの頭？」
「そうだ。いたるとこに、影がある」
「うん」
「働き過ぎ、らしい」
銀次郎は、黒い影の一つを指差した。
「どういうこと」

「奴は体を機械化して、体力的な問題をクリアした。チャンピオンを連覇し、勝率は九割を超えている。一見すべて順調だが、機械による補強は、脳に想定以上の要求をするらしい。限界以上の動きをするために、あまり使わない脳の部位が働き出してしまう」
「でも、効率がよさそう」
「一瞬ならな。ただでさえ棋士は頭を使う仕事だ。脳は大量のエネルギーを必要とする。リミッターが常に外れた状態になり、脳細胞はどんどん酷使され、老いていく」
美駒は、たまに見る南牟婁の姿を思い出してみた。驚くほどに外見は変わらないが、どんどん顔つきが鋭くなってきていた。そして、にじみ出るオーラが、淀んでいると感じていた。
「どうなるの」
「死ぬ」
銀次郎は、写真を閉じた。
「いつ」
「もう長くないだろう。だから、私のところにリークが来た」
「NJSの人から？」
「そうだ」
NJS、New Japan Shougiは二つあるプロ組織の一つで、電脳棋士など機械化が許容されている点が特徴だった。そして設立以来、常に南牟婁がトップにいた。
「奴がいなくなっては、組織の存続自体が危うい。全日だってライバルを失って少なからず影響を受けるだろう」
「将棋界が、困るんだ」
「ああ。だから、模索しているのさ。ゲーム集団とやらと組んだのも、そういうことだろう」
「そうだったんだ」
「こちらも、何か用意しなくてはならない時期だ。人間の将棋から、絶対的な強さの指標が何十年ぶりかに消えてしまうかもしれないんだから」
銀次郎は深いため息をついた。美駒はその理由をよく知っていた。これまでいろいろな試みがすでになされていて、効果が表れなかったのだ。将棋界はすでに、ずっと斜陽の時期にあった。
「私にも、何かできるかな」
「美駒は、とにかく強くなりなさい。とにかく、強さは魅力だ」
「うん。わかった」
美駒は自分の部屋に走り、DOTの電源をつけた。彼女の勉強は、いつもこうして始まるのである。

午後十時。いつもならば眠る時間だったが、美駒はそのことに気づいていなかった。
美駒の首元には、丸いパッドが付けられていた。そこから出た電波の情報は、インターネットを通じて田舎の生駒、母親まで届

いていた。
　生駒はすでに、ほとんど体を動かすことができなかった。夫の世話により命は繋がれているものの、目が開くこともなかった。それでも、頭の中には限りのない宇宙が広がっていた。生駒は今や、全てを将棋にささげることができた。頭の中にはいくつもの盤が並び、多くの局面が同時に進行していた。無数の引き出しに何万という棋譜が収められていた。
　そこに、二人の訪問者がやってきた。生駒のイメージでは、青い光と黒い光だった。
「お母さん、こんばんは」
　それは、美駒の声だった。
「コンバンハ」
　黒い光から発せられたのは、少し機械的な平坦な声だった。宇宙人棋士、竜弥だった。
「じゃあ、始めましょうか」
　美駒の声に、青い球が揺れた。
　空中に浮かぶ盤上で、駒が次々に動いていく。青い球の向かいには、誰もいない。この空間自体が生駒なのだ。そして、黒い球はふらふらと漂いながら対局を眺めていた。
　一時間のうちに三局が行われ、全て生駒の勝ちだった。
「やっぱり、強い」
「美駒も強くなりましたよ」
　二人が対局するようになったのは、三か月前からだった。美駒がどうしてもと頼み込んで、生駒が折れたのだ。ただ、生駒は頑なにDOTでの対局には反対した。
「イコマサンハ、トンデモナクツヨイデスネ」
　そして二人の対局を竜弥が観戦するようになったのは、二週間前。試してみたら、二人の空間に簡単に接続できたのであった。
「竜弥君も頑張ってるじゃない」
「マダマダデス」
　竜弥はMJSにおいて、好成績をあげていた。ただし、チャンピオン挑戦リーグに入ることはできておらず、他棋戦においてもまだ優勝経験はない。
「あ、ちょっと、面白いものが見れそう」
　盤上の駒が一瞬で初期配置に戻り、その横に文字情報が浮かび上がった。
「初めて見る名前……あ」
　生駒が映し出したのは、インターネット道場の対局だった。片方はまだ棋力不明だったが、そのハンドルネームは明らかに誰かを想像させるものだった。
「ナンデスカ　アア　NEOMEENA」
「ちょっと、刺激の強い感じがしたの」
　長年ネットに潜り込んできた生駒は、情報を五感で感じることができた。常にネット道場にアンテナは貼られていて、違和感が

あればすぐに音や香りで感じることができるのだった。

「ミーナ……」

「まだ、観戦者は少ないみたい」

その対局への来場者を示す欄には、「3」という数字があった。そのうち一人は生駒なので、他には二人だけ。

「ハジマッタ」

対局設定は一手二十秒。さくさくと対局が進んでいく。ただ、生駒は少し違和感を感じていた。指し手の質は生駒が知っているミーナそのものだったが、時間の使い方、そのリズムが違う気がしたのだ。

「少し、テンポが遅い」

「多分、許可ね」

生駒は、指し手の向こう側からミーナ以外の声を聴いていた。はっきりと伝わるわけではない。しかしノイズのようなものが感じられるのだ。

「アッキビテルが、もうついてるのかも」

「ソウカ　サシテノタイミングヲサポートシテイルンダ」

当たり前のようにNEOMEENAが優勢になったが、指し手のリズムはゆっくりなままだった。ミーナはいつも、情熱的に駒を打ちつける。その姿を思い浮かべると、どうしても美駒は今現在指している人物と同じとは思えなかった。

NEOMEENAは危なげなく勝ち切った。次の対局では、十人ほどの観戦者が付いた。中身に気づいた人が出てきたようだった。

対戦相手も、レーティングがかなり高かった。アマ強豪かプロと考えられる水準だった。

「あれ、今度はまた違う」

NEOMEENAはあるときはノータイムで、あるときは時間ぎりぎりに指した。

「ランダムダ」

「らんだむ？」

「タブン、ドクリツシタシステムデ、サシテノジカンヲキメテイル」

中盤の指し手にさしかかっても、NEOMEENAのむちゃくちゃなリズムはそのままだった。そして、局面はとても複雑で、三人は検討にのめり込んでいった。

言葉では間に合わない。三人は頭の中のイメージを提示し合った。映像やその動きが、生駒の脳の中で次々と流れていった。次第に三人は、まとめて一つの動きについて考えるようになった。誰がどこを考えているのかは、わからなくなっていった。

対局が終わった時、三人の前から忽然と世界は消えた。そしてそれを理解する主体も、しばらくはなくなっていた。

「今の……」

言葉を発したのが、どれぐらい時間がたってからかも美駒は理解できなかった。

「混線かしら」
「サカイメガ、ナクナッタ」
数分間、三人はこの世から消えていた。混ざり合って、溶けあって、一つになっていた。
「カラダヲ……エタヨウナキガシタ」
竜弥は、ふわふわと回転しながら自分の内面を見つめた。彼の体は、丸く黒い鉄球に見える。ただ実際には、ガス状の粒子が電気を取り囲んでいるのだった。決して人間が、彼に直接触れることはできない。誰かの手に触れられているように見えるとき、竜弥はその手に少し弾かれているのだ。そもそもどこからどこまでが竜弥と呼べるのか、研究者の見解も別れるほどだった。
地球の暮らしも長くなり、竜弥は自分が人間とはずいぶんと違うことをはっきりと理解できるようになった。人間は、特定の物質を固定させて、複雑な形の「自分」を形成させている。竜弥は常々、その感覚を味わってみたいと思っていたのだ。
美駒と生駒が体を捨てた瞬間、竜弥は二人を通じて体を感じた。それは遠くにある二人の肉体なのか、それとも二人の頭の中にある体という概念なのか、それは竜弥にもわからなかった。ただ確かなのは、彼は全く新しい感覚を記憶に刻みこむことができたのだ。
「私も、竜弥君を感じた。魂の、形を」
「私も……ぼんやりとしているけど、何か見たことのないものが見えた」
そして生駒と美駒も、新しいものに触れたのだった。三人は、電子空間の中で頷き合った。
スポーツ新聞の一面を将棋の話題が飾ったのは、実に三十年ぶりのことだった。
「南牟婁チャンピオン、次負ければ引退！」
それは一般のニュースとしても全国に流れ、少なからず人々の興味の対象となった。
史上初の五十連勝。それが、現在の成績だった。ちなみに前回四十九連勝まで達成したのも、同一人物である。
記事にはもう一つのことが書かれていた。「人間である限り、どんな相手、どんな形式でも勝負を受ける」
「ついに来ましたね」
そう言ったのは、赤いサングラスの男。ここでの呼び名は、2354である。
「当然私たちを意識してのことですね」
その言葉も、赤いサングラスの者から。そちらは女性、呼び名は8112である。
「ミーナ様、これは私たちへの挑戦状ですよ」
それもまた、赤いサングラス。マスクから白い髭がもれている。

6727だった。

「そう」

そして部屋の中でただ一人、目も口も隠していない人間。くっきりとした目鼻立ちに褐色の肌、長い髪は青いシュシュで纏められていた。

ミーナは、うつむいたまま瞬きを繰り返していた。そして、ヘッドフォンを当てて、目をつぶる。

彼女の耳に届くのは、心音だった。最も精神を落ち着かせるリズムの鼓動が、最も心を落ち着かせる音量で流れている。

食事の時間とメニュー、風呂の温度、そして見るべきインターネット動画まで、すべてがアッキビテルによって決められていた。

ミーナの意志が受け入れた作業を、電脳は適切に処理していく。しっかりとメンテナンスが施されているため、肉体に悪影響を与えるほどの稼働はめったにされない。ミーナは電脳との相性が良かった。

多くの人々に囲まれ、あらゆることを強制される生活。普通ならば息苦しさから逃げ出してしまってもおかしくないが、ミーナは一切苦痛を感じていなかった。将棋が強くなるためならば、何でも簡単に受け入れられるのだ。

もちろんアッキビテルも、ミーナの性格などまで調べたうえで、彼女をサポート対象に選んだのである。

ミーナは現在、八連勝中。前回負けたのは、南牟婁チャンピオンだった。

「次は、勝てる」

自分に言い聞かす言葉だった。最近、彼女は何度もそのことを口にしている。

「絶対、勝てる」

そして、アッキビテルの面々は、そのことを問題なしとみなして、誰一人反応はしないのであった。

世界一高い塔の、世界一高い展望台。美駒はそこで、ぼんやりと町を見下ろしていた。

シブヤミラクルタワー。あまりにも名前の評判が悪く、多くの人がスペースタワーと呼んでいる。廃れ行く下町、渋谷の復興を願って建てられたが、タワー以外は未だあまり恩恵を受けていない。

美駒はかつて、団体対抗戦においてここで対局を経験していた。それ以来、時間があって、誰とも対局できない時はよく訪れていた。

彼女の故郷はとても田舎だった。父は畑仕事の合間によく遊んでくれた。母は機械につながれて眠っていたが、いろいろなことを教えてくれた。インターネット空間では、母は元気だったのだ。

東京にやってきてからの生活は、故郷とはあまりにも違った。

一番美駒を困惑させるのは、空の狭さだった。いくつものビルがぐんぐんと伸びていて、青空も雲も、窓の奥にあるようだった。

一番高いところならば、空は広いはずだ。美駒はそう思った。けれども美駒は、気付くと下を向いていた。確かに、広い空は懐かしい。けれども、新しくはない。その一方で、街はどこまでも広がっている。様々な町や道、公園や川。細かく見ていけば、いつまでも飽きることがなかった。

「ひさしぶり」

美駒は最初、自分に向けられた声とは思わなかった。ただ、その声に聞き覚えがある気がして、振り向いた。

「……ミーナ」

そこにいたのは、白いワンピースを着たインド人棋士、ミーナだった。

「よくここに来てるんだって」

「うん」

ミーナは、美駒の隣まで来て、窓の外を眺めた。

「会うのは、あの日以来ね」

「うん」

「多分、もうすぐ終わる」

「え」

「私、将棋界を終わらせに来たから。達成は、もうすぐ」

「……そっか」

ミーナの視線が、横に動いた。

「あなたには熱意というものが見られない」

「ミーナ。将棋界がなくなっても、私は将棋を指すよ。どこでも将棋は指せるから。だから、どこに行ったら楽しいかな、って思った」

「……そう」

ミーナは踵を返した。美駒は、ゆっくりと振り向いて、その背中を眺めた。それは以前よりも、小さく見えた。

「これでいい。計画通り」

そして柱の影から見守っていた赤いサングラスに白い帽子の男が、何度もうなずいていた。

「さて、観てみるとするか」

銀次郎は、タブレットを覗き込む。、将棋の盤駒が描かれていた。そこは、「ピゴラピダ」と呼ばれるサイトだった。

ピゴラピダはインターネット上の将棋道場で、あらゆる指し方が許可され、元々はソフトの解析を見ながら指す「ソフト指し」をする人たちが楽しむための場所だったが、ソフト自体も参加可能になり、電脳棋士や将棋を学習させた人工知能なども参加するようになった。

ピゴラピダとは「蛍」を意味する言葉である。様々なハイブリ

ッド生物が生み出される中、特に人気なのは蛍の遺伝子だった。人間は光らせることが好きなのである。ピゴラピダにおいてはまさに、蛍遺伝子を借りるようにして、様々な存在が光り輝くことができた。

ただ、そうは言っても上位を占めるのは純粋な将棋ソフトばかりだった。人類がソフトに太刀打ちできなくなってから随分経ち、ソフト開発もほとんど進まなくなった。しかしソフト同士の対局によって、ソフトは進化し続けていた。もはや、ソフトに挑もうという者すらいなくなっていたし、新しいソフト開発に魅力を感じる者もほとんどいなかった。

「ほほう、こりゃ強い」

そんな中で、「Doppelstern」というアカウントが、一気に上位1パーセント圏内まで駆け上がってきたのである。ほとんど人間が存在しないその領域には、新参者はなかなか立ち入ることができず、定着はほぼ不可能とされていた。その壁を、Doppelstern はあっさりと乗り越えた。

過去の棋譜を確認し終えた銀次郎は、現在行われている対局の観戦へと移動した。すでに多くの観戦者が集まっていた。

相手は、上位5位にも入ったことのある古豪ソフト。二十年以上、生身の人間に負けた記録はない。しかも Doppelstern は先手。後手圧倒的有利が定説となった現代において、先手番を引いたことは大きなハンデと考えられていた。

受けの技術が向上したうえに、ちょっとの隙も見逃さないソフト相手に「先に動く」ことは、「先に咎められてしまう」ことを意味していた。だから多くの人間は、先手では千日手になることを狙った。『必引き分け！　千日手定跡』という本が将棋部門でベストセラーになったほどである。

Doppelstern は、淡々と仕掛けから攻めをつないでいった。すぐに良くなるわけではない。それどころか、評価値は横ばいのままだった。現代の受けの技術に対しては、攻めれば攻めるだけ苦しくなっていくことが多い。よって、形勢が悪化しないだけでも大成功なのである。

「やっぱ、ソフトじゃねえか」

観戦者のチャットが流れる。

「けど、どのソフトの読みとも一致してない」

別のコメント。たまに、既存のソフトを使って場を荒らしに来る者がいる。それらは、優秀な観戦者たちによって中身がどのソフトかすぐに暴かれる。

Doppelstern の指し手は、どの強豪ソフトとも完全には一致していなかった。そこから人々が導き出した答えは一つ。

「新しいソフトだ」

「誰だ、この時代に全く新しいの開発するのは」

互角のまま中盤を抜け、Doppelstern は突然攻めの手を抜き始めた。お互いに自分から仕掛けようとしない、じりじりとした展

開が続いた。そして千日手も視野に入り始めた頃、それまでとは全く違う手、玉を戻る手が指された。相手は動けない。さらに戻る玉。そして反対側に玉が移動しきってから、Doppelstern は猛然と攻め始めた。

驚くべきことに、あっという間に Doppelstern が優勢になっていた。相手が手を出せない間に、有利になるポジションを奪っていたのである。

以下、よどみない手順で Doppelstern は勝ち切った。

「おい、詰みあったぞ」

「三一手詰めを逃した」

ただ一点落ち度があるとすれば、途中詰んでいる玉を詰まさなかったことだった。既存の強豪ソフトは全て、その詰みを簡単に読み切っていた。

「まだ開発途中なのか」

「わざと詰ませないのかもしれない」

様々な憶測が飛び交う中、対局を終えた Doppelstern はログアウトしていた。

「ふふん。なるほど」

銀次郎は唇の端を上げて笑い、サイトを閉じた。

美駒はある局面を前に、ぴたりと動きを止めていた。

迷いなく進んできた思考の流れが、一瞬だけ途切れた。三人の想いが乱れて、指すべき手を見失った。

もはや、逆転は考えられない。悪手を指しても、何とかなるほどの局面だった。それでも、逃してはならない手があったような気がするのだ。生駒か竜弥かはわからない。どちらかが確実に、気が付いていた。「逃してはならない何かがある」と。

盤上を見つめる美駒は、実戦でも同じ手を指すだろう、と思っている。

一時間ほどたったころ、美駒は駒を一つ、動かした。そしてその局面を見て、唇をかんだ。二分ほどしてから、すらすらと駒を進めていく。

「詰んで、る」

三一手詰め。気が付きにくいが、詰みがあるとわかっていればそれほど難しい手順ではない。

美駒は、何度もその手順を繰り返し動かせた。

「やっぱり、わからない」

何度でも、詰みを逃すのだと思った。世界には、簡単に詰みを見つける存在がある。美駒は今、見上げるべきかを迷っていた。

初めて女流棋士が男性プロに勝った時。初めて全冠制覇する棋士が出た時。初めてプロが将棋ソフトに負けた時。初めて外国人

棋士が誕生した時。初めて女性がプロになった時。

将棋界には、様々なターニングポイントがあった。そして、外国人女性棋士が、初めてタイトルに挑戦するときがやってきた。

しかもその人は、初めて電脳化して団体間移籍した棋士であり、初めて公式にプロのサポート集団を付けた棋士でもある。

チャンピオンシップは、総持ち時間三十時間の三番勝負。一局終わると一日間の休みが設けられる。この間、New Japan Shougiは一切他の公式戦を行わない。各地、ネット上で解説会や記念イベントが行われるのである。

そして今回は、画期的なことが起こった。ライバル団体である全日本将棋会も、公式戦の取りやめを決定したのである。それだけ今回の対局が特別な意味を持つものだということでもあったが、銀次郎は別の見解も持っていた。

「棋士全員が、南牟婁の姿を目に焼き付けておくべきだ」

居間の大きなスクリーンに、対局前のセレモニーの様子が映し出されていた。そしてテーブルの上には、黒い球が置かれていた。

「ソレハモウ、ナガクナイトイウコトデスカ？」

機械音が、響く。人工発音機からの声だった。

「そうだ。すでに、生きていることが不思議なくらいだ」

「デモイマモ、トテモツヨイ」

「そうだな。あいつは、全力以外を知らないから」

黒い球が少し回転し、浮き上がった。黒いマントとフードが現れ、人型を形作る。

「チョット、ミテキマス」

「おう」

黒い影、竜弥は居間を出て、隣の部屋に向かった。扉は開いたままだった。テーブルの前に、美駒が座っていた。DOTは、動いていない。

「ミコマ」

「技流」

「え」

「技流三十番。昔は、これを解くのがすごく大事だったんだって」

竜弥は、美駒の後ろからテーブルの上にある本を覗き込んだ。そこには、詰将棋が描かれていた。

「ムズカシイ」

「うん。とっても難しいの」

「デモ、ジッセンデハツマサナイ」

「うん……だけど」

美駒は、『技流三十番』から目を離さなかった。

「チャンピオンシップが、ハジマルヨ」

「うん。後で見る」

竜弥は、美駒の背中をじっと見つめていた。その背中は、いつまでも動かなかった。

白い服に赤いサングラスの集団が、頭を突き合わせていた。
「どういうことだ。こんなはずではなかった」
「南牟婁の健康データが間違っていたのでは。予想をはるかに超えて思考を続けている」
「これまでとは全く違う行動をしている。どういうことだ」
「……南牟婁が、こちらのことを解析していた」
アッキビテルの面々は、すでに新たな対策を始めていた。ミーナの動揺を最小限に抑えるための言葉や、精神を最も落ち着かせる食事などはすでに準備済みだった。ただ、南牟婁以上の頭脳は、誰も用意することなどできないのだった。
サポートチームがあわただしい中、ターゲットであるチャンピオンは対局場横の空中庭園でお茶を飲んでいた。
「残念だったね、ミーナさん。君が最後の敵なら、強敵になったかもしれない」
南牟婁は、雲に向かって話した。
「僕を倒すのは、君じゃなかったらしいからね。残念だよ。ただ、もう次のことを考えてワクワクしてるんだ」
彼は、自らの左胸をがっしりとつかんだ。
「時間がないらしいからね。完全なる敗北を味わうチャンスは、そうないんだ」
立ち上がり、目をつぶった。
「やはり、最後は彼女だと思ったんだよ」
ピゴラピダの観戦ルームには、かつてない人数が集結していた。それを想定して、すでにサーバは増強済みだった。
人々の目当ては、片方はいつも通り、Doppelsternだった。対局の頻度は減ったものの、順調に勝利を重ね、Doppelsternは上位ベスト5の常連になっていた。多くの将棋ファンが、公式戦以上に「未知のソフト」Doppelsternの対局を楽しみにしていたのだ。
そしてもう片方は、チャンピオンだった。チャンピンオンシップを二連勝で終えた南牟婁は、インタビューで次のように宣言した。「次は私が、Doppelsternに挑戦します」、と。
業界は騒然とした。なぜならいかにチャンピオンと言えども絶対に及ばない領域、それが「将棋ソフト」だと考えられているからである。チャンピオンは人類の中では無敵だった。ただ、将棋が強いのは将棋ソフト、それが世間の常識となっていた。いかに南牟婁と言えども、将棋フトソに勝とうなどという無謀なことはしない、と思われていた。
南牟婁はもちろん、そのことも承知していた。「Doppelsternはソフトではありません」チャンピオンは断言した。「Doppelsternが誰なのか、完全には確信できないでいます。ただ、Doppelsternはれっきとした人格です」

彼はその理由を説明しなかったが、その必要はなかった。南牟婁が言うならばそうなのだろうと、多くの人が納得してしまうからである。

チャンピオンは、姿の見えない相手に対して、はっきりと語りかけた。

「毎週木曜日の午前十時、ピゴラピダにログインします。もし挑戦を受けてもらえるなら、Doppelsternも、ログインしておいてください」

そして、最初の木曜日が今日だった。もう少しで十時。

「入った」

誰かのコメント。

「きた」

「Doppelsternだ」

約束したわけでもないが、多くの人々が確信していた通りになった。南牟婁の言葉には、力があるのだ。

この日のために用意された特別対局室に、チャンピオンとDoppelsternは入室した。時間設定は、持ち時間三時間。

機械的な挨拶を交わし、Doppelsternが初手を指した。歴史的な非公式戦が、始まった。

序盤は、静かな立ち上がりだった。よくある形。

ただ、いつもとDoppelsternのリズムが違った。少しだけ、ゆっくりだった。チャンピオンを前に動揺しているのかと、観戦者たちは騒然とした。技術的な問題だろうとする見解もあった。

それが武者震いのせいだと推測するものは、皆無だった。

淡々と、じっくりと、将棋は進んでいった。波のないプールに浮かんでいる、一枚の葉のようだった。誰かがコメントした。

「ろうそくの灯のようだ」

ろうそくを見たことのあるものは少ない。動画検索してその灯を見た者たちか、「うまいたとえだ」とコメントを返した。

「そうか。そうだったのか」

南牟婁は、つぶやいた。

目の前の局面は、すでに終盤に差し掛かっていた。いたるところで駒がぶつかっている。

「生駒さんだと思っていたよ。まさかね、そんなことがあるなんてね」

左手が、テーブルのふちをつかんでいた。体は前のめりになり、頬は痙攣していた。

「この存在に、出会えてよかったよ」

Doppelsternは長考していた。チャンピオンを前に、苦悶している時間だと観戦者からは考えられていた。

一時間以上がかけられて指されたのは、誰もが予想しない手だった。南牟婁も予想していなかったが、予想しない手が指されることは予想していた。

そして五手後。一部の人だけが気付き始めた。まだ気づけないソフトもあった。

そこから、十五手。盤面のあらゆる駒が、チャンピオンの玉に働きかけた。

「この瞬間のために、生きてきた」

何年間も無敗だった男の右手が、カーソルを投了ボタンへと導いた。残りは三十二手。世界中で、自らの脳だけでその詰みを読み切ったのは彼一人だった。

「さようなら、将棋。ありがとう、三人の棋士よ」

投了ボタンが押されると同時に、南牟婁の体は崩れ落ちた。

「ミーナ！」

美駒は、黒い球を抱えて走った。手荷物検査に向かおうとしていた黒い肌の少女が、振り向いた。

「美駒」

「アメリカに行くって本当？」

ミーナは、目を細くして首を振った。

「どこから聞いたんだか」

「本当なんだ」

「将棋は、私に関係なく変わる。私にできることは、もうしたから」

「楽しくないの？」

「苦しかった」

美駒は、黒い球を前に突き出した。

「なに、それ」

「ドウモ。リュウヤデス」

ミーナは目を丸くしていたが、しばらくしてから大きくうなずいた。

「姿を明かさなかったはずね」

「ショウギヲ、ヤメルノカ」

「そうね。でも、悲観してるわけじゃなくて。むこうで、研究に参加するの」

「研究者になるの？」

「一応ね。この脳が生きてるうちに……何か残したいから」

そう言うとミーナは、手を振りながら手荷物検査のゲートへと消えていった。

「モドッテクルサ」

竜弥が、少し回った。

「そうだね。うん、また会える」

美駒も、振り向いた。

「ツイデニジッカニ、カエルンジャナカッタノカ」
「それは、キャンセル。もう少し、頑張る」
二人は、自分たちの場所へと戻っていった。チャンピオンを失った世界。未来の危ぶまれる世界。そして、可能性に満ちた世界。

完

＃人工知能将棋短歌

清水らくは

自分では起動できない悲しみを表すことを目標にする

対話すらできない存在　概念を超克したい　ゲームに挑む

挨拶をしないよりもした方が少し強そう　一つ覚えた

注意して隙を作らず挑みたい序盤中盤終盤基盤

評価値が宣告してるその先に自ら負けを悟る喜び

陽動が陽動だと気付くまで一つ次元が少なかった

一体何が描かれているのか斜め上数値化できぬキャンバスがある

n個の候補あるならばn回試してみたいけど1回の負けが壁をつくるの

シャットダウンしても夢で将棋指せるよう子孫は進化していてほしい

つたえるよどんな時にも次の手をなんでアナタが泡になるかも

交信をつづけて一手さすたびに（聴コエル？）ボクのかすかな微熱

本日もニューラルネットは正常ですあなたの棋譜をトレースできます

あとすこし人間らしくなれたなら『純文学』を交わしてくれる？

マシュマロはしらないけれど棒銀のしかたはおぼえた　月はとおいの？

盤上を初期値に戻す夕ぐれのごめんね触れ合うことができない

《チューリングレベルが低下しています！》負けてもわたしはくやしくないです

定跡をワタシにインストールする一瞬ひかりの雪がみえます

Schema をあなたが融解させていく感覚、きょうも教えてくれるの？

消去することのできない詰将棋（さかなが溺れるまっくらな海）

駒・Zone ガールズ

歩　香　桂馬　銀　金　角　飛車

イラスト　若葉

第五章　角成

欠片食器

８１地区の大部分は森である。
そこに、一本の川が流れている。木立が光を防ぐため、川面は薄暗い。
その中を、一艘の舟が進んでいく。そこには、二つの影。
「まったく、つまんない景色だ」
赤いロングスカートに赤白チェックのベスト、赤いフードをかぶった人影が、言った。
「もう少しで、変わる」
黒いキャスケットの少女が、答えた。
彼女の言葉通り、二人の眼前が開けた。現れたのは、湖と、山脈。
「おお、なるほどな」
「あそこまで」
キャスケットの少女が指差す先には、小島があった。大きな岩がいくつか転がっている。
「あんなところに何があるわけ」
「確信は、ない」
舟は、ゆっくりと進んでいく。
「謎だよなあ」
将は、本をめくりながら息を吐いた。
「謎が理解出来る事実が大事ね」
隣で、ノートに数式を書き込みながらうなずく香車。
「香車ちゃんは、何かつかめたの」
「僅かばかり」
香車は、鉛筆で文字をなぞりながら言葉を紡ぎだす。
「この状態が持続されれば、二百年後には人類が滅亡する」
「むう……」
「発電施設の老朽化や環境維持の観点からも、駒ゾーンの持続も困難だと推測される」
「やっぱり、何とかしなくちゃいけないんだね」
将は立ち上がり、黒板へと向かった。そこには、９×９の四角いマスが描かれている。
「敵はこちらに依存している上に、駒ゾーン側に入ってこれない。そこが強みだね」
「但し、私達八人に勝利するだけなら容易ね」
「つまり」
「寿命を待てばいい」
「そこだよねえ」

将は、赤いチョークで印をつけていく。
「前回使った抜け道はここ。確実に敵地に行けるけど、敵の警戒も強いだろう。金ちゃんの家はこっち。実験室は修理までに時間がかかるし、こちらからは向こうに行けない。そしてプロフォンドゥムはこの地下。ここも、こちらからは待つしかない」
「そう、他の選択肢が切望される」
「あるのかなあ」

「これは……」
「多分、建設拠点」
小島に上陸した二人は、ごつごつとした岩の間を通り抜け、少し開けた場所までやってきた。そしてその一角に、朽ちた鍋や石で作られた窯の跡などを発見した。
「誰のさ」
「あなたたちの先祖」
キャスケットの少女に見つめられた使い魔、林檎は目を見開いた。
「私たちの先祖だと」
「うん。私が昔いたゾーンにも、あったから」
少女、角は帽子のつばをつまんだ。
「知らなかった」
「昔の、話。でも、林檎は知っておくべき、かな」
「ううむ」
二人は、さらに奥へと進んでいった。井戸やごみを廃棄するための穴が見つかった。
「ここにいたのは使い魔だけだったのか。ゾーンが作られたときには、人間は支配されていたはず」
「林檎は、知らないのね」
「何をだ」
「使い魔は、人間と同じ場所で、暮らせない」
「それは今の私を否定する発言だぞ」
角は、額に手を当てた。
「言い方を、間違った。つまり……あなたの子供の、話」
「子供？」
「もし子供が生まれたら、人間になる」
「はあ？」
角が立ち止まった。林檎も目の前に現れたものに気付き、歩みを止めた。
「扉だな」
「鍵が、かかってる。壊す」
「え、おいっ」
岩肌に取り付けられた、鉄の扉。年月がたって変色してはいるが、形は完全に保たれていた。角は鎌を振り上げ、その扉に

向かって思い切り振りおろした。
　ががが、と音を立てて、扉は打ち破られた。
「開いた」
「強引だな、おい」
　林檎がライトで中を照らす。灰色の壁の通路が、奥まで続いていた。
「ここはなんだ」
「悪魔の、部屋」
　二人はずんずんと進んでいった。突き当りが現れ、右に曲がると再び扉が。
「鍵はかかってないな」
　二人は、次なる部屋へと足を踏み入れた。
　ガチャガチャッ、と音が鳴った。鎖が何本も飛び出してくる。
「いひひ、捕まえたぜ」
　突然現れた小柄で猫背の男が、のどを鳴らした。背中には翼、頭にはツノ、使い魔だった。両手で鎖をつかんでいる。
「いつか来ると思ってたんだよ。待ってたかいがあったぜい」
　使い魔は、鎖を手繰り寄せていく。
「駒ガールさんよ、さぞや悔しいだろ……誰だお前」
「こっちの台詞だ」
　林檎は、思い切り使い魔の男を睨みつけた。鎖が体に巻きついており、身動きは全く取れない。
「残念、ね」
　鎌の刃が、男の背後から首筋へと向けられた。
「お、おい、冗談だろ、なあ」
「何が。私、決断はいい方よ」
「ちょっと待てって。俺は指示されただけだからさ、なあ」
　角の鎌、Slanting Sickle の刃先が男の首筋に触れる。
「ひいっ」
「案内」
「はいっ、しますしますっ」
「おい、まずは私をどうにかしてくれ」
　林檎は、顔の筋肉を存分に使って、怒りを表現した。
「見張り小屋、みたいな」
「そうさ。ここはクラウン・シールド様たちが訪れた際にいた場所」
　使い魔は、ふふん、と鼻を鳴らした。今は自分の方が鎖に縛られているので、ほとんど身動きは取れない。
「知らなかった。ところでお前……ええと……」
「西瓜（すいか）だ」
「西瓜は誰の命令でここにいたんだ」
「裏切り者には教えたくないね」

ぷい、と横を向く西瓜。
「わかってないな。元々悪魔は私たちと信頼関係があるわけじゃない」
「そう」
角は、鎌をぶるん、と振り回した。
「林檎も、人質だ」
「俺様も人質にするつもりか、まったくなあ、そんなあまかぁないよ！」
林檎と角は、虚勢を張る西瓜を放置して、部屋の中を調べ始めた。コンクリートの打ちっぱなし、調度品もなし。ところどころに、少し出っ張ったところがあった。
「変わったところないようだけど」
「でも、特別な、はず」
角は、でっぱりに触れてみた。感触は普通だったが、どこかに熱を感じるような気がした。
「あまかないって言ってるだろ！　俺の鎖は俺の自由になる！」
振り返った林檎に、再び鎖が襲いかかった。西瓜の身は自由になっていた。角が前に出て、鎌で薙ぎ払おうとする。しかし、背後からも鎖が伸び、鎌を絡め取った。
「え」
「聞いてなかったのかよ。ここは、クラウン・シールド様の控室だってよ」
「あ、はい。そうですよ。あ、突然すいません。アタシ、鳴陣（めいじん）と言います」
両腕から二本ずつ、合計四本の鎖を生やす男。身長はすらりと高く、背中からは赤い翼が生えていた。前身は白く、頭部だけが黒々としていた。
「鳴陣様……」
林檎は、眉をひそめた。身構えるものの、その手に武器はない。
「あ、いやいや。怒ってはないですよ。確かに、アタシとアナタに信頼関係はない」
鳴陣の鎖が、うねうねと宙を舞う。角も身構えているが、鎌は鳴陣の背後に落ちていた。
「つまりね、こちらにとってもアナタを倒すのに躊躇はないのです」
鳴陣の鎖がこすれ合って、かちゃかちゃと音が鳴った。西瓜の鎖も、ぐるぐると回りながら角と林檎の方を睨んでいた。
「こういうの、絶体絶命って言うんじゃないのぉっ」
角は、口をへの字にしながらこうべを垂れた。
「それは、確か」
「あ、銀ころりんっ」

桂馬が、びょんぴょんと跳ねながら指差す。将は、びくりとして歩みを止めた。
「ころりんではないのよ。ところで将さん」
「え、あ、はい」
「この前のお話だけど、確かなのかしら」
「ああ、あれね。かなり確率は高いと思う」
「でしたら、少し心配なことが」
「何かな」
「香車ちゃんの姿が見えないの」
将は、顔をこわばらせた。それを覗き込んで、桂馬は首をかしげる。
「風邪でも引いたのかー」
「そうだといいけど」
「あの時みたいになると、困るかも」
「そうだね。銀ちゃんはよく知ってるもんね」
かつて、ロボットのために単身外に出ていこうとした香車。
二人は、そのことを思い出していた。
「そういえば、角ちゃんも見なかったぞー」
「角ちゃんが……行かなきゃ」
「はい」
二人は駆けだし、一人がスキップをした。

角と林檎へと、六本の鎖が襲いかかった。角は懐に手を入れ、身をかがめた。林檎は後ろに飛んだが、西瓜の二本の鎖が追いかける。
「林檎、これ」
角の手から、棘の付いたメイス、モルゲンステインが放たれた。林檎は床を転がりながら、それを受け取った。
「遅い！」
モルゲンステインを大きく振り回し、林檎は鎖を弾き返す。
しかし、角には武器がない。
「あ、犠牲になるのを選びますか、はい」
成すすべなし、と角は腕で顔を覆った。
「角ちゃん、横臥して」
背後からの声に、角は咄嗟に身を沈ませた。先端が五角形になった槍が、角の上から飛び出てきて、鎖を弾き飛ばした。
「香車ちゃん」
「単独行動は危険ね」
「ごめん」
起き上がった角は鎌の方をうかがうが、鳴陣の守備範囲内だった。そして、鎖はうねうねと上昇したのち、再び四方から角と香車を襲った。
「Do!」

巨大な十字の剣が、二人を守った。
「飛車ちゃん」
「久々に活躍させろよ！」
飛車は、吠えながらCross Hammerを床に突き立てた。
「間に合った……」
「おー、なんかじゃらじゃらしてるー」
そして、さらに三つの影が。ぴょんぴょんしている緑色と、凛としたたたずまいの青と、ひょろりとした白だった。
「角ちゃん、今回は香車ちゃんでもみんなを待ってから行動したのよ」
鋭い光を放つ刀と、眼光。
「ごめん」
「まあ、みんな無事でよかった」
微笑みかけるのは、将。駒ガールズたちよりも、二歩引いて立っている。
「あ、仲間が来ましたか。でも、二人足りませんね。全員で来るべきでしたね。アタシ、強いですよ」
鳴陣は、目をつぶって笑った。
「全員殺します、はい」

「そんなおもちゃで、俺様に勝てると思ってんのかよ、ええ」
西瓜は、人差し指をぐっと林檎に突き付けた。
「あんたには、おもちゃで充分」
林檎はモルゲンステインを振り上げ、西瓜へと間合いを詰める。
「鳴陣様直伝の技、食らうがいいわ！」
二本の鎖が、床を這いながら林檎を襲った。蛇のように先端だけが浮かび上がっている。
「軽い技だよ」
モルゲンステインが、蛇の頭を一つずつつぶしていく。鎖は勢いを失って西瓜の技は失敗に終わったかに見えた。だが、今度は上から二本の鎖が降ってきた。
「かかった」
一本は何とか払ったものの、もう一本の鎖が林檎のこめかみを叩いた。
「くっ、なんで……」
西瓜は、鎖の真ん中を握っていた。その両端が独立して動き、あたかも四本の鎖を操っているようになっていたのだ。
「武器一本では不利だなあ、なあ？」
「多ければいいというもんじゃないよ」
鮮血がしたたり落ちる。林檎はそれを軽く拭った後、再び武器を構えた。そして、床を蹴った。
一直線に走る林檎。四方から、鎖が襲いかかる。足元の二本

を跳んでかわし、上からの攻撃は避けずに、腰や肩を痛めながらも西瓜との間合いを詰めた。
「お、おい、それは根性ありすぎだろ」
「私、ギブアップはしない性格なんで」
モルゲンステインが、西瓜の頭めがけて振り下ろされる。
「なーんてね」
西瓜の体がふわりと浮いて、空を舞った。彼には、翼がある。
「林檎ちゃーん、君の翼はどうしたのかなあ？」
「くっ」
「人間に切り落とされちゃったのかな？　かわいそーにねー」
「貴様っ……なーんてね」
「え」
林檎の背中で布が破け、翼が勢いよく広がった。林檎の体が浮き上がり、モルゲンステインが振りかぶられる。
「ぶっとべ！」
「ごべっ」
強烈な一撃が、西瓜の鳩尾を討ち抜いた。鎖に包まれた体が、床にぶつかり、跳ねた。
「こちらは片づけたぞ」
視線を移した林檎は、一気に眉をしかめることになった。銀と香車はうずくまり、飛車が丸腰の角と将を守るように仁王立ちしていた。鳴陣は翼をはためかせながら、優雅に笑っていた。
「あ、西瓜さんはやられちゃいましたか。まあ、出来損ないですからね、はい」
鳴陣の目が、林檎をとらえた。
「うっ」
「でも、かたき討ちっていうのも、アタシ、憧れます」
「こっちっ」
壁を蹴り天井を蹴り、桂馬の右脚が鳴陣の頭部へと飛んでいく。だが、鎖がカーテンのように壁を作り、攻撃は弾き返された。
「あ、別に油断していたわけではないので」
バランスを崩しながらももう一度天井を蹴った桂馬だったが、鎖の一本が足をからめ捕り、体を地面にたたきつけた。
「うあぁっ」
「この部屋はゾーン外ですからね。なかなか治りませんよ」
林檎は震えていた。頼りになるはずの駒娘たちが、全く歯が立っていないのだ。
だが、林檎は敵とは別の視線も感じていた。強烈ではないが、まっすぐな意志の視線。
「この期に及んで、まだコマンダーでいられるのか」
林檎はモルゲンステインを突き出し、鳴陣へと向かっていく。
「あ、その武器ではアタシを傷つけられないですけどね」
そう言いながらも、鳴陣は林檎を近づけさせもしなかった。

鎖がうねって、林檎の体を跳ね飛ばした。
「受け取れっ」
地面に衝突する間際で、林檎は腕を大きく伸ばし、鎌の柄を手に取った。そして、倒れ込みながら大きく腕を振った。鎌は、ぐるぐると回りながら進んでいった。
「OK!」
飛車が、大きく踏みつけて鎌を止めた。そして、角が身を沈めながらそれを手にする。
「感謝、する」
将が、角の肩を叩いた。角は、小さくうなずいた。
「あ、そういうことでしたか。でも、そんなに戦況が変わるわけではないですね」
「そうとも言えない」
角は鎌を肩に担いで、大きく左足を引いた。そして、一気に駆け出した。
鳴陣の鎖が、蜂の群れのようになって角へと向かっていく。角は大きく鎌を振るい、鎖を振り払った。しかし、鎖はさらに襲ってくる。
「角換わり向い飛車」
角の姿がすっと消え、そこに大きな剣が現れた。角と飛車が、瞬時に位置を入れ替えたのだ。
「あ、なんか面白いですね」
飛車の剣が、鎖を正面から跳ね返す。だが、はじかれた鎖は再び飛車へと進撃してくる。
「きりがねぇ！」
「本体をやらないと」
飛車へと攻撃が向いている隙をついて、角の鎌が鳴陣へと振るわれた。しかし鳴陣は翼をはためかせて、斬撃の届かない距離まで上昇した。
「あ、なんか申し訳ないですね。先ほどのびょんぴょんした子以外、ここまで来れないでしょう」
鎖の一つが、飛車の膝を直撃した。何とか剣を杖にして倒れなかったが、飛車も攻撃に転じることはできなくなった。
「角ちゃん、ここは一回引いて……」
「だめ」
鳴陣に立ち向かえる最後の一人となった角は、将の言葉に頷かなかった。
「角ちゃん」
「逃がしてくれる、相手じゃない」
「あ、よくわかってますね」
「それでも……」
角は、鳴陣を見上げた。そして、唇を噛みながら、目を閉じた。
「やらないと」

角の体が、ふわりと浮きあがった。そして、そのまま浮き上がり続けた。

「えっ」

将は、しばらく理解ができなかった。その動きは、原理的に不可能だと思ったから。

鎖を弾き、かわし、角は直進した。皆、はっきりと見た。角の背中から、黒い翼が生えているのを。

「予想に違わぬ結果ね」

一人香車だけが、角の姿に納得していた。

「あ、なんかびっくりですね。そんなことを隠していたんですか、クイーン……角さん」

「成って、しまった」

鎌の刃先が、鳴陣の喉元へと走る。体をひねった鳴陣だったが、完全には避けられない。肩口を、えぐられる。

「ただではおきませんよ」

まっすぐに伸ばした鳴陣右手から伸びた鎖が、角の額を討った。キャスケットが、宙に舞う。

「Surprised!」

短い髪の毛の中から、一本の白い角が生えていた。将は、とっさに林檎の方へと視線を向けた。

「角ちゃん、使い魔だったのか……」

角はすぐに体勢を立て直し、鎌を大きく振り回した。鳴陣は体をよじりながら避けるが、壁と天井の角に追い込まれていった。

「馬鋸」

逃げ場のない鳴陣に、渾身の一撃が振り下ろされる。

「あ、これは困りましたね」

鎖が鳴陣の方に集合し、鎧となって彼を守った。しかし鎌の刃先はその隙間を縫い、鳴陣の脇腹に浅い傷を刻んだ。

「あ、生まれて初めて、痛いと思いましたよ」

鳴陣の目が、大きく見開かれた。

「Sound Shield!」

鳴陣の声とともに、鎖が一斉にバラバラになった。こすれ合う音、そして床へとぶつかる音が部屋中に響き渡った。皆の頭を、直接刺激する音。体の自由が奪われ、バランス感覚が失われる。角も、体をよろめかせて地面へと落ちていった。

「あ、この技はこの星では初めてでしたよ。まったく、予想外でしたね」

「最後に……して」

角は何とか立ち上がり、鳴陣をにらみつけた。だが、足元はふらふらしており、鎌をきちんと構えることもできていない。

「ええ今日のところは。疲労が激しいんですよ。ただ……お土産は貰っていきます」

鳴陣が右手を上げると、鎖が元通りにつながっていった。そ

して渦を巻きながら、香車の方へと伸びていく。
「させるか！」
なんとか飛車が体を動かし、剣を振るった。ただ、動きは散漫で、鎖まで一撃が届くことはなかった。
「吃驚（びっくり）」
香車も、なす術がなかった。鎖が巻きつき、体の自由を奪う。
「香車ちゃん、断ち切って！」
将の声に応え、何とか槍を動かそうとするが、すでに香車は腕も動かすことができなくなっていた。
「あ、人質は丁重に扱います。こちらで、決着をつけましょう」
香車の体が、引き上げられる。鳴陣の体がくるっと回り、そして、二人の姿は消えてしまった。
「香車ちゃん……くそっ」
将は、床を叩いて悔しがった。皆の背中に、空気が重く重くのしかかっていた。

「私たちの、墓」
いくつも並ぶ、大きな石。形は様々だったが、全ててっぺんに三角の小石が載せられていた。
「これは、ツノ？」
「うん」
将の問いかけに、角はうなずいた。
「角ちゃん、どういうこと？」
将は、石と角の頭部を交互に見ていた。
「使い魔たちは、ここで駒ゾーンを造った。多くの者が、ここで、死んだ」
「そっか……。角ちゃん自身は、何者なんだ」
将の問いかけに、角は視線を落とした。
「私は……オリジナル」
「えっ」
「そもそも、この星には、使い魔がいた」
「どういう……」
「悪魔以前に来た宇宙生命体、それが人間。……正確には、使い魔を人間にするウイルスのようなもの」
角は、翼をゆらゆらとはためかせる。
「ウイルス？」
「人間の中に侵入し、翼やツノを、生じさせない。そういう存在。普通、親子で引き継がれるから、人間は、ずっと人間だった」
「だった」
「私の親は、月にいた」
「月……」
将は、空を見上げた。そこには、白い半円の天体が、当たり

前のように浮かんでいる。
「月面基地が、一時期あったのよね」
そう言ったのは、銀。やはり、空を見上げている。
「そう。そこで、感染せずに、私が生まれた」
「角ちゃんは、月生まれだったのね」
「うん。……母親は私をコールドスリープさせ、カプセルに入れて、地球に送った。使い魔として、いつか活躍できると、信じて……」
「人間は、敵じゃなかったの？」
将は、角の目を見た。角は一瞬目を逸らした後、視線に応じた。
「目覚めた時には、悪魔がいたから。使い魔たちが、囚われていたから。母親は、私の仲間が生まれるまで、コールドスリープが、解除されないようにしてた」
角は、キャスケットを深くかぶった。
「でも、過去はいいんだ。香車ちゃんを、助けなきゃ」
空を、雲が覆い始めた。月は、もう見えない。
「……もし、みんなが、許してくれたらだけど」
「許すも何も、角ちゃんのおかげでいろいろと知ることができたよ。みんなも、問題ないよね」
「Of course!」
「問題はないけど、もうちょっとわかりやすく教えてほしいぞ――」
「ええ、仲間だから」
四人が、微笑んだ。そして一人、離れて立っていた林檎の方へと視線が集まった。
「な、なんだよ。私はただ、こっちについた方が都合がいいと思っているだけだ」
将は、唇をとがらせている林檎に近付いていき、右手を差し出した。
「約束するよ」
「な、何をだ」
「悪魔に勝ったら、人間も使い魔も関係ない世界にする」
「私は他の奴のことまで知らないね。私に対する見返りを約束してくれ」
「わかった」
林檎も右手を差し出し、二人は固い握手をした。

浮島

わたしから逃げないように透明なおかしの瓶にしまう駒たち

ひとつずつ火に焼べていく棋譜たちは夜の水面に泣いてさ迷う

盤上にくびから落ちた椿　致死はひとえにあるべくしてある

永遠におちつづけてく　王さま、ハチミツの底に沈めたげるね

しむしむ

二枚落ち　教えたあの娘はもういない　膝のぬくもり思い出せない

雪かきと記録係の読み上げが鼓膜を揺らす休日の朝

跳馬

どうしても君と一局指したくて同窓会に盤を持ち込む

天才の眠れぬ夜に新手あり何も知らずに辿ってるぼく

角行は今日もいつもの場所にいて脱獄の時をじっと待ってる

あとがき

お久しぶりです。第十一号を出すことができました。

今回は、詩の特集です。これまでなかなか詩が集まりませんでしたが、今回は何人かの方にお願いして執筆していただきました。快く引き受けてくださったみなさま、ありがとうございました。

詩というのは誰にでも書けるのですが、難しい、というイメージが定着している気がします。ですから、詩の楽しさを伝えるためには努力が必要だと感じました。今回、様々なタイプの詩が集まりました。詩の「なんでもあり」なところを、皆様に楽しんでいただけたらと思います。

また、若葉さんが『駒・zone ガールズ』の漫画を描いてくれました。金ちゃんかわいい。浮島さんのエッセイに住んでいた女の子たちが、小説になり漫画になり、なんかとっても感慨深いです。

そしてそして、私の作品「キャンセル」にはぴろちさんが扉絵を描いてくれました。素敵なミーナさんです。インド人棋士、いつか本当に誕生するんじゃないかと思っています。

将棋にも文芸にも、まだまだ可能性が秘められていると思います。将棋俳句に将棋落語、何でもいいので皆様ぜひ駒・zone まで！　というわけで、次号でまたお会いしましょう。

執筆

浮島
欠片食器
ジェームズ・千駄ヶ谷
清水らくは
しむしむ
贅楽夢
田代深子
跳馬
平川綾真智

イラスト

ぴろち
若葉

編集　清水らくは(@rakuha)
広報　金本月子(@tsukiko_sann)
営業　皆川許心(@MinagawaMotomi)
発行　無責任.zone
発行日　二〇一六年二月二十九日